福原麟太郎

詩心私語

人と思想■文藝春秋

と思想

詩心私語

福原麟太郎

文藝春秋

詩心私語

定価　一〇〇〇円

昭和四十八年三月二十五日　第一刷

著者　福原麟太郎

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(代)二六五一一二一一番
郵便番号一〇二・振替東京七八七四三

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

＊万一落丁・乱丁の際はお取替いたします

© Rintaro Fukuhara 1973　Printed in Japan

1095-610260-7384

目

次

I

チャールズ・ラム傳 11
ラムのすべて〈序に代へて〉 13
＊
第一章 テムプルでの生ひ立ち 17
第二章 文學青年 29
第三章 人生模様 41
第四章 『エリア隨筆集』 54
第五章 古なじみの顔 97
第六章 ペントンヴィル 109
第七章 『シェイクスピア物語』 121
第八章 『劇詩人名作抄』 134
第九章 花やうやく開く 142

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第十章　洒落と酒　151
第十一章　不惑に達したラム　159
第十二章　戀をするラム　171
第十三章　運の高みに立つ　179
第十四章　ラムの世界　187
第十五章　『エリア隨筆後集』　200
第十六章　修羅の太鼓　216
第十七章　消えかかつた燈火　224

＊

チャールズ・ラム書目　232
Ⅰ　本邦文獻　232
Ⅱ　ラムの本の思ひ出　236
Ⅲ　終りに　240

II

英文学と私 243
一九二〇年代 245
一九三〇年代 249
叡智の文学 254

III

演劇に関して 261
風俗喜劇 263
乞食のオペラ 269
サヴォイ・オペラ 278
軍艦ピナフォア 284
ミカド 288

デイム・イーディスのこと　291
饗庭篁村　295

Ⅳ

文学論　303
詩心の喪失　305
詩の説　308
諷刺とユーモア　316
エッセイについて　332
芸術の鬼　336
限りなき浪曼　339
濡れた文体　344
文学的方法　348
演劇の彫刻化と絵画化　362

V
文学と文明 373
VI
随筆 417
茶色の洋傘の教師たち 419
椰子林の中の学生たち 427
大学学長たる亦難し 438
停年教授閑暇あり 445
交友について 456
第十三番目の智慧 462
四十歳の歌 468
思い出の記 472

早春の花々　484

Ⅶ

欧州風光　493
イギリスの春　495
フランスの思い出　500
多島海にて　503

あとがき　516
著書一覧　523

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

詩心私語

I チャールズ・ラム傳

『聲』　昭和三十四年四月～昭和三十六年一月
『學鐙』　昭和三十六年二月～昭和三十八年五月　連載

ラムのすべて
——序に代へて——

チャールズ・ラムについて興味を持つたのは岡倉由三郎とか、平田禿木とか、戸川秋骨とかいふ、親しく私の手をとつて文學藝術のことを教へて下さつた諸先生がラムを好んで讀んでゐられたからだが、さういふゆかりのほかに、私にとつて何か引きつけるものがあつたと思ふのは、ラムの文學青年ぶりではなかつたであらうか。とにかくどうにかして詩壇へ出たいともがいて、クライスツ・ホスピタル校で同學の親友コウルリッヂが、どうやら名を出しかけてゐるのにすがつて、そのコウルリッヂの出す詩集へ自分の詩をいくつか入れて貰つたりして、自分も詩人の仲間にはいらうとする。自分は東印度會社の會計係の青年にすぎない。その焦燥を私も感じうるやうな氣がした。さういふ文學青年としてのラムをつかまへてみたいと思つた。

そしてラムはコウルリッヂに對しては尊崇の念さへ抱いてゐながら、決してぺこぺこしない。コウルリッヂの詩の批評なども臆せず思ふとほり述べてゐる。これは友達の關係として羨ましいと思つた。自分たちの仲間のリーダーとしてコウルリッヂを認めながらも、仲間としては對等なのである。われわれの國の文學青年たちの間でも、そのやうな友情で結ばれてゐる同人の例などすくなくあるまい。そのうちサウジーやワーヅワスとも近づきになる。

やがて、ワーヅワスはワーヅワスらしい長者の座につき、サウジーは何だか詩人的高雅に缺けてゐる印象を當時の世間にも與へてゐたのではないかと思ふ。（大英博物館の讀書室で讀書に疲れて、あふむいて椅子の背に襟首をもたせかけると、圓天井の帶に英文豪十二傑か何かの名が列んでゐるのが目に入つた、その中にサウジーがあつたのをいつもヴィクトリア朝の大衆的嗜好だらうと思ひながら眺めてゐたものだ。）さういふ連中が、ともかく仲間だ。そのうちにロイドのやうに脱落していく文士もあれば、バートンのやうな青年の近づいて來てラムの弟子になるのもある。さういふことも文學青年の社會ではどこの國でも見られるであらう。

私はさういふ文學青年としてのラムに興味を持つた。ロンドンでも古風なテムプルの地内に生れ育ち住んでゐたと

か、姉さんに精神病の發作があつて、誤つて母を殺した。その姉さんを看守るために自分の戀も結婚もあきらめて、一生姉さんと暮したといふ説明のしかたが、ラムを一ばんやさしく紹介する道であらう。ラム自身にもさういふ遺傳の端緒が見えたこともあつたと言へば、話は單に犧牲的姉弟愛の美しさばかりでなく、すこし悲劇的になつてくる。そして發作の徵候が姉に見えてくると、姉弟は泣きながら手をたづさへて病院へゆくのを近所の人は見たものだといふ話になると、ついこちらも貰ひ泣きをするが、それはさういふ話なので、『シェイクスピア物語』のうるはしい合作者たちの身の上についての、噛にきくあはれな話でしかないと私は思つてゐた。しかし書簡集を讀んでゐると、文學青年としての身もだえは、しみじみと傳はつてくる思ひがしたものである。

ところがある日、寺西武夫君に私がラムの書簡集を讀んでゐる話をしたら「長い長い手紙をかくでせう。ものに憑かれたやうにいつまでたつても切れない手紙があるでせう、すこし變なところがあるみたい」と言つた。この寺西さんの言葉は私にとつて開眼であつた。それなのだ。身もだえは文學青年としてだけでなくラムのこの世に生きる全道程に横たはつてゐたものだ。

一八〇四年ラムは二十九歳だが非常に貧乏である。しかしそのころから彼のまはりにはハズリットだとかディ・クウィンジーだとかリー・ハントだとかいふ文學史上に輝いてゐる諸文星が集つて來て、彼は、ひるまは東印度會社の會計係であり、夜は文士である、といふ二重の生活をしてゐる。そして一八〇六年には、ラムの宅の水曜會が始まり彼は文壇社交の中心的存在となるのだが、これは實に不思議である。それはブドー酒に醉ひ、トラムプをし、洒落を言ひ合ふだけのことであつたとしても、ラムがいつまでも指をくはへて文壇の垣のぞきをしてゐたのではなく、やがて『劇詩人名作抄』が出るといつのまにかその本流にあり、ひのき舞臺に立つてゐたといふ意味で、何かそこにラムの德とか、ラムの好運とかいふものを考へさせる。文學青年は、もう詩を書かなくなつて、いはば雜文や評論、子供の本や下手な小脚本などをなにくれと書いてゐるうちに、文學青年でなくなつてしまつて居り、まはりには新進の文士たちが居つて交遊が始つてゐたといふわけである。これは日本の文學青年たちに羨まれるであらう。

そのうちにやつと貧乏を切りぬけ、次第にらくになつてゆく。ラムは他人に金錢を恵むことはあつても、他人から借錢を負ふといふことはなかつたらしい。子供のときよくドルアリー・レーン座の切符をくれた、ラムの名付親、油屋のをぢさんが死んで、ほんのすこしばかりの土地と一軒

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo